

# 鉄砲山古墳

(埼玉)

## 第21話



### さきたまの謎5

この古墳は六世紀後半頃の全長一一二メートルの前方後円墳で、さきたま古墳群の中では二子山・稲荷山古墳に次いで三番目に大きな古墳です。

前方後円墳は、上から見ると台形（前方部）と円形（後円部）が組み合わされた形をしています。

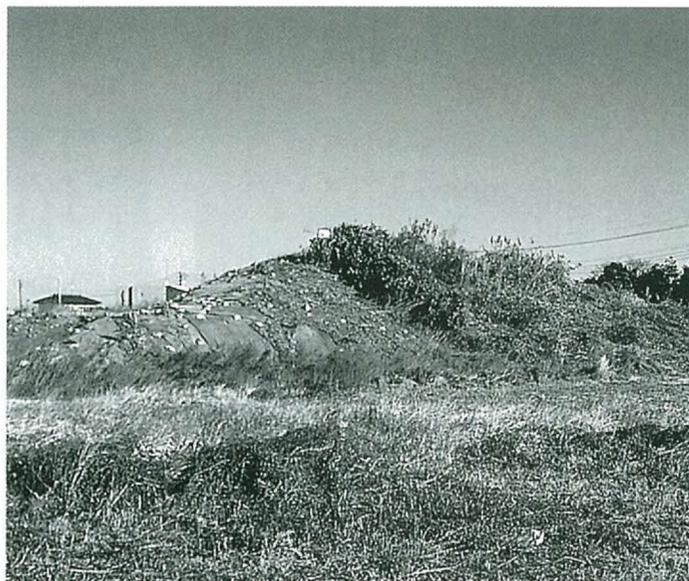
台形の下辺の中心点と円形の中心点を結ぶと縦の中心線が引け、前方後円形は左右対称になることが分かります。この中心線の方が三つの古墳ともよく似ており、一番古い稲荷山古墳の中心線を東に少しずらすと、二子山古墳の中心線になり、さらに東にずらすと鉄砲山古墳の中心線になります。

つまりこの三つの古墳は、縦方向に極めて意識的に配置されており、稲荷山古墳に葬られた人物の後継者の墓が、二子山古墳から鉄砲山古墳へ続くと考える根拠にもなります。

問題は、二子山古墳より鉄砲山古墳が規模的に小さくなったことです。規模の縮小は力の弱体化を意味しており、鉄砲山に埋葬された人物の生前に何かがあったようです。

将軍山古墳  
(埼玉)

第22話



## さきたまの謎6

この古墳については、さきたま資料館による復原整備のための発掘調査が平成三年度以降継続的に行われ、さまざまな新発見がありました。

中でも古墳の規模が全長九〇メートルの前方後円墳で、墳丘に埴輪列が一周まわっていたこと。古墳を取り巻く堀が二重で稲荷山・二子山古墳と同じように西側外堀に造出しがあること。石室に使われた貝殻を含む石は千葉県の富津海岸付近のものであること。出土品から六世紀後半でも比較的古い段階につくられたことなどが確認できたことは重要な発見でした。

明治二七年に発掘された石室の副葬品の中に、馬冑や蛇行状鉄器がありました。これらは古代朝鮮半島にあった高句麗国の騎馬兵の装備の一つでしたし、一緒に出土した銅鏡も当時の新しい外来文化であった仏教文化の影響を受けたものです。

こうした特異な副葬品を持って埋葬された将軍山古墳の被葬者は、生前にどんな活躍をしたのでしょうか。鉄砲山古墳が小さくなったことと関係するかも知れません。

瓦塚古墳  
(埼玉)

## 第23話



## さきたまの謎7

鉄砲山古墳が小さくなったことを、ここ二回ほど強調して書いています。古墳が小さく造られることは葬られた人の生前の結果ですから、鉄砲山古墳に埋葬された人物が活躍していた時期、六世紀中頃に埼玉で何らかの変化があったと思われるます。

この六世紀中頃にあった目に見える変化は、瓦塚・奥の山・愛宕山古墳などの中規模の古墳が造られたことです。

まず瓦塚から見てください。

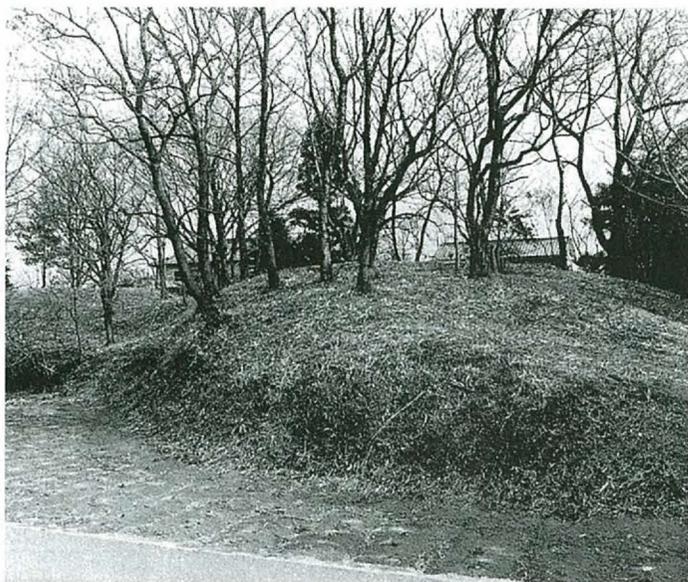
この古墳は、これまで数多くの発掘調査が行われ、それにもとづき復元整備が進み、全体の形がわかるようになってきました。規模は、全長六九メートルほどの中型の前方後円墳ですが、堀は二重の長方形で、稲荷山などの大型古墳と同じ堀の形をしています。

さらに、西側の内堀・外堀の間にある中堤帯なかついでとよばれる低い堤の上から埴輪が大量に発見され、その配置から埋葬された人物の葬儀に関する儀式が表現されていることがわかりました。二棟の家形埴輪、たくさんの人物埴輪、動物埴輪などは、葬儀が盛大に行われたであろうことを想像させるのに十分です。

# 愛宕山古墳

(埼玉)

第24話



## さきたまの謎⑧

かつて山頂に愛宕神社があったのでこの名があります。

この古墳は、これまで二度発掘調査が行われています。その結果全長五三メートルほどの前方後円墳であることがわかり、埼玉古墳群の中では一番小さい規模の前方後円墳です。

特色の一つは、古墳の後円部と前方部の接する所をくびれ部と呼んでいます。くびれ部東側の外堀と内堀の間にある低い堤の上に円筒埴輪や人物埴輪、馬の埴輪などが整然と密集して並べられていました。後円部分はまだらなことをみると、くびれ部分を東側から見ることを強く意識していたことがわかります。

次に、堀の形が大型古墳とおなじ二重の長方形をしていることです。小さい古墳ですが、大型古墳と同じ条件で造られていることになりました。この二重の長方形をした堀は、埼玉古墳群では一番多い形ですが、全国的に見ると実は極めて珍しい形なのです。

普通は上の方が半円を描いたような盾形たてがたをしています。なぜ埼玉古墳群では、長方形を選んだのでしょうか。何らかの理由があったはずですが、まだ解明されていません。

奥の山古墳  
(埼玉)

第25話



## さきたまの謎9

この古墳の発掘調査は、昭和四三年に堀の形を調べるために行われ、たくさんの埴輪が出土し、瓦塚古墳に近い六世紀中頃に造られた古墳と考えられています。

この古墳の最大の謎は、堀の形です。一重で後円部側の堀が平行するように丸くなる、盾形をしています。埼玉古墳群の前方後円墳の堀は、奥の山古墳以外はすべて二重の長方形をしています。なぜ奥の山古墳だけ異なった形を採用したのでしょうか。

堀の形を全国的に見ると、実は奥の山古墳の盾形が一般的です。長方形の堀を持つ古墳は千葉県にもありますが、二重の長方形の堀は極めて珍しい例であることがわかります。それが埼玉古墳群の特色でもあるのです。

これまで何回か見てきたように、鉄砲山古墳が規模を縮小して六世紀後半に出現する前の六世紀中頃に、瓦塚・愛宕山・奥の山古墳などの中規模の古墳が出現し、やがて將軍山古墳が造られてくるなど、六世紀中頃に埼玉で大きな変化があったことを、古墳の変遷から知ることができます。その変化がなんであったかは、まだ十分解明されてはいません。

# 中の山古墳

(埼玉)

第26話



## さきたまの謎10

この古墳の名前の由来は、南側の方角から見ると、三つの古墳が並んで見えたことからつけられたようです。一番奥が奥の山。次が中の山、手前が今は削られてありませんが、戸場口山古墳と呼ばれていました。

この古墳は、これまでの調査で六世紀末から七世紀にかけての時期に造られたことがわかっています。しかし、いわゆる埴輪が出土しません。人物埴輪も円筒埴輪も出土していません。

行田周辺でも、古墳に埴輪を樹立しなくなるのは、七世紀初頭前後の時期で、埴輪を持つ、持たないことが、古墳の造られた年代を決める重要な要素になっています。

その代わり、埴輪に似たものが出ます。横から見ると、ちようどお酒の徳利のような形をしています。焼き方からは、土師器と呼ばれる赤い土器に似たもの。須恵器と呼ばれる灰色の土器に似たものに分かれます。さきたま資料館で展示していますのでよく観察してみてください。

これらは、古墳の墳頂から、また二重の堀を区画する中堤帯上から発見されます。

これを埴輪を模倣して造ったものと考えるか。まったく別の意識から造ったものであるとする二つの考え方があります。

戸場口山古墳  
(埼玉)

第27話



古墳出土のかめ

## さきたまの謎11

この古墳は、現在削られておりませんが、渡柳にあるコルコート株式会社と中の山古墳との間にあった古墳です。

昭和六三年と翌年の調査により、一辺が約四メートルほどの四角い方墳で、堀も二重の方形をしており、七世紀前半頃に造られた古墳と考えられています。埼玉県内には意外と方墳は少なく、市内でも藤原町の地藏塚古墳だけです。同じ七世紀、藤原町には八幡山古墳という七十メートル級の大きな円墳が出てきます。

埼玉古墳群では、前方後円形の稲荷山古墳がまず造られ、同時に小規模の円墳が現れます。さらに日本一の規模を持つ円墳・丸墓山古墳が出て、前方後円形も規模の大小の差が出てきます。最後に四角形の方墳・戸場口山古墳になり終末を迎えるという、古墳の平面形態からの全体的な流れが考えられます。

当時の都があった近畿地方では、方墳を選んだのは蘇我氏の系統。円墳を選んだのは反蘇我氏の系統で、古墳の形の違いは両者の勢力争いがあった結果であるとの考えもあります。

こうした都での勢力争いが、さきたまの人々にも影響し、方墳と円墳にわかれたのでしょうか。

白山古墳  
(長野)

## 第28話



## さきたまの謎12

今回は目を北に転じて、稲荷山古墳の北東約三百メートルのところにある、白山古墳について考えます。これまでの調査から直径五〇メートルほどの円墳で、七世紀前半ころに造られたようです。この古墳から北側にはもう古墳は造られなくなりますが、南の稲荷山古墳との間には埴輪をもつ古墳がたくさんあります。

古墳の一部に白山姫神社がまつられており、周辺には石室に使われた石が露出しています。板状の石が長瀬から産出する緑泥片岩で、卵状の石が角閃石安山岩といわれ、群馬県にある榛名山が六世紀に爆発して噴出した石です。角閃石安山岩という難しい名前ですが、いわゆる軽石です。削りやすく上下を平らにして積み上げるには適しており、六世紀後半から七世紀代に造られた古墳に多く使われます。

前回さきたま古墳群は方墳の戸場口山古墳で終わると書きました。そのほぼ近い時期に稲荷山古墳の北東に五〇メートル級の円墳・白山古墳が造られ、さらに北方向の見える位置にやがて大型円墳・八幡山古墳が出現します。

こうした七世紀代の古墳の移り変わりが、聖徳太子が活躍した時代のこの地域の政治的な動きを反映している訳ですが、それがどんなものであったのかはこれからの課題です。

せんげんづか  
浅間塚

(埼玉)

第29話



## さきたまの謎13

浅間塚は、鉄砲山古墳の東側にある前玉神社の社殿がのっている、小高い丘部分がそうです。社殿の建設時にだいぶ姿が変えられました。昭和三八年に出版された『行田市史』上巻には、「高さ八・七メートル、縦五メートル、横四八メートル、周囲九三メートル。円墳状を失っていない」と書かれています。

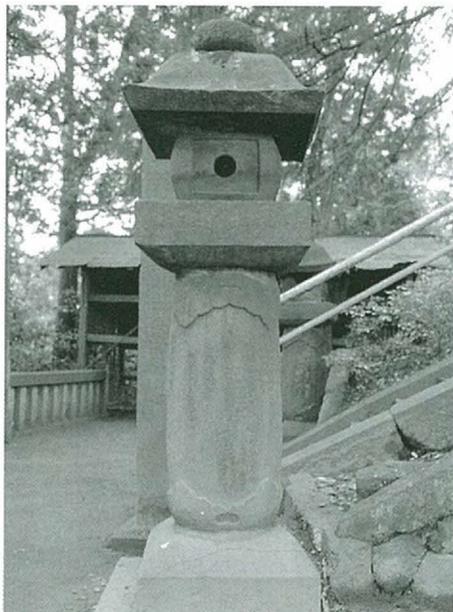
でも、これまで発掘調査が行われていませんので、この浅間塚が本当に古墳であったかどうかは、実ははっきりとはしていません。ただ、行田市内では地形的に見ても人工的に盛り土をしなければ、このような高まりはできませんから、もともとは平地にあった神社が、山岳信仰と結びつき高い所に移る必要が生じたために、古墳の上に移されたと考えるのが自然かも知れません。

円墳ならば直径五十メートル級の円墳。前方後円墳ならば中の山古墳や、瓦塚古墳などの中型の前方後円墳の中間になります。

円墳なら最後の方墳・戸場口山古墳との前後関係が問題です。前方後円墳なら中の山古墳前後の、この地域における前方後円墳をつくる最後の時期の資料として大切な古墳になります。いずれにしても、この塚が古墳であるのかどうか。造られた時期はいつか、はっきりさせたいものです。

前玉神社  
(埼玉)

## 第30話



## 万葉集と行田 1

万葉集には、仁徳天皇から七五九年（天平宝字三年）までの長歌、短歌、施頭歌など四千五百首あまりの歌が収められています。

行田に関係する歌は四首。小埼玉の沼、埼玉の津を詠んだ歌。防人としておもむいた藤原部等母麻呂と妻の歌二首です。

今回から何回かに分けて、歌四首と歌碑について見ていきます。

まず、前回で書いた埼玉の前玉神社の歌碑について見ていきます。

浅間塚の上に鎮座している前玉神社の社殿に参拝するには、急な石段を登ります。石段の登り口に高さ約二メートルの一对の石灯籠があり竿の部分に二首の万葉歌が刻まれています。社殿に向かって左側の石灯籠が「小埼玉の沼」右側が「埼玉の津」になります。

この石灯籠は、今から三百年程前の江戸時代の元禄十年（一六九七）十月十五日に地元の埼玉村の氏子たちが奉納したもので、万葉集に掲載された歌の歌碑としては、全国的にみて最も古いものの一つです。

江戸時代には万葉集の研究がさかんになり万葉集への関心が高まってきましたが、全国に先立って、歌碑を建立することを実行した埼玉の氏子たちの文化的なセンスは素晴らしいものであったことがわかります。